

日時 平成 29 年 7 月 31 日 (月) 10:30~16:30  
テーマ 子どもの見立てと支援、校内体制づくり  
～子ども多主体の支援体制～  
講師 畿央大学 准教授 大久保 賢一 氏



7 月最後の公開講座は、「子どもの見立てと支援、校内体制づくり」と題して、SSC で開催しました。幼稚園、小中学校、特別支援学校から 33 名が受講しました。

講師は畿央大学准教授の大久保賢一先生です。大久保先生は、応用行動分析の視点から、子どもの問題行動をどうとらえるかというお話をエピソードを交えながらお話いただきました。子どもに限らず、私たちは何か行動を起こす時には合理的・効率的に動いており、行動に意味があるかどうか重要です。行動が起こりやすくなる時はどういう時か、行動を変えるためには何が必要なのかを分析することが大切です。問題行動を障害や特性のせいにして何も解決しません。問題行動に注目し、それをやめさせることだけに力を注ぐのではなく、目標から遠い場合でも目標に近い行動をほめてできることを増やす(シェイピング)、行動をつなぎ合わせて繰り返して練習する(チェイニング)、援助やヒントを少しずつ抜いていく(フェイディング)を組み合わせて、適切な行動を増やしていくことが大切だと述べられました。また、「罰的な対応」については、短期的には効果があるように見えるが、効果は維持しないこと、その人の表現手段を奪う場合があること、罰に慣れる、見つからないようにすればいいと思ってしまう、信頼関係が構築されない、無気力になる、本人も他者に罰を使えばいいということ等を学んでしまう、などの副作用があり、その方法には反対の立場であることを毅然と話されていました。

後半は、学校全体で取り組むポジティブな行動支援についてお話いただきました。演習として、児童生徒に期待することを学校目標として挙げ、それを達成するためにはどうすればいいのかをグループで考えました。目標を達成するためには、行動をほめること、記録を取ること、職員で共有することが大切です。また、特別支援教育と言うとどうしても個別対応が多くなってしまいがちですが、ユニバーサルなアプローチをまず行い、その上でさらに個別対応が必要な子どもには特別な対応をすることが大切だと述べられました。最後に、子どもたちの生活が「飴」＝「褒められた、楽しい・やりがいがあると感じる」で満たされるようになるように、と講義を締めくくられました。



## <参加者アンケートより感想> (一部抜粋)

- ・具体的なエピソードがたくさんありわかりやすい講義だった。
- ・問題行動にある「理由」をつかみ、その「結果」を見つめなおす力をつけたいと思った。
- ・二学期から自分の対応を変えることで、子どもたちがどう変わっていくのか楽しみだ。
- ・行動の原理に反した対応や、過剰な支援について耳の痛い話が多々あった。研修内容を校内全体に広め、組織力を高めることで子どもにとって安心できる学校づくりをしたい。
- ・これまで経験をもとに子どもに合わせて指導していたつもりだったが、自分の行動が子どもにとってどのような意味を持つのかを考えてこれからは指導していこうと思う。

8 月後半の公開講座は、8 月 21 日 (月) に「発達障害のある児童生徒の不登校」を SSC で行います。